



ルー
テル

藤が丘だより

発行 月報委員会

発行日 2019年10月6日

№. 65

神は、すべての人々が救われて
真理を知るようになることを望んでおられます。
テモテへの手紙一 2章4節



礼拝献花より

神と共に 人と共に

ルーター派キリスト教会 日本福音ルーテル藤が丘教会 牧師 佐藤和宏
〒227-0043 横浜市青葉区藤が丘 2-31-21 tel 045-973-2729/ fax 045-439-7009
URL:<https://www.jelc-fujigaoka.org/> mailto: fujigaoka@jelc.or.jp



シリーズ説教

『恵みの分かち合い』

牧師 佐藤和宏

ルカ16章19節〜31節

そこで主イエスは、一つのたとえを話し始められました。「ある金持ちがいた。いつも紫の衣や柔らかい麻布を着て、毎日ぜいたくに遊び暮らしていた。」ファリサイ派の人々の理解では、この人が金持ちであるのは神に祝福されているしるしであり、それはこの人が神の命じる戒めをことごとく忠実に守っているからということになるでしょう。そのような彼らにイエスは続けられます。「この金持ちの門前に、ラザロというできものだらけの貧しい人が横たわり、その食卓から落ちる物で腹を満たしたいものだと思っていた。」確かに神の祝福をいただいで、人は豊かにされると考えるのは、聖書が教えることに合致していると言えるでしょう。しかし「神と富とに仕えることとはできない」と教えられた主イエスは、その祝福を個人のうちにとどめるのではなく、相手を見いだすように、

そしてその相手と分かち合うようにと教えられているのです。

世界では数々の貧しい国があり、多くの人が飢餓に苦しんでいる現実があります。ある団体の試算によると、世界のすべての人が世界中の収穫を等しく分け合うと、誰もが満たされ、飢餓に苦しむ人はいなくなるかとされています。しかしそれができないのは、一部の豊かな国が余分に抱え込み、食べ切れないたくさんのお金を無駄にしている現実があるからなのです。豊かであることが悪いわけではありませんが、「門前に横たわるラザロ」の存在に気づき、配慮して行かなければならない、豊かさが与えられた者には、そういう義務と責任とがあるのです。

このところに来て、私はレビ記に示されるある戒めを思い出しました。旧約聖書は確かに神と富とを結びつけているのですが、それだけではないことを教えてください。「聖書略（19章9節以下）」人が畑を持ち、収穫を得るのは、神の祝福によると言えるでしょう。ファリサイ派の人々の理解によるなら、それはその人が戒めに忠実である結果、神の祝福を得た

にちがいません。戒めに忠実であるがゆえに神に祝福される、豊かにされる。そしてさらに戒めに忠実であろうと努める。このような好ましく映る循環。これこそ、ファリサイ派の人々が主張する「神と富とに仕える」ことで得られる祝福された人生なのです。しかし、神の祝福は戒めを守るその人に与えられるのですが、その人だけに向けられたものではないことを、さきほどのレビ記にみる戒めは示しているのです。「穀物を収穫するときは、畑の隅々まで刈り尽くしてはならない。収穫後の落ち穂を拾い集めてはならない。」「これらは貧しい者や寄留者のために残しておかねばならない。わたしはあなたたちの神、主である。」つまり、その人が神に祝福されるのは、律法にあるように「神の戒めに忠実であった」からかもしれません。しかしその祝福は、決してその人にだけとどめられるものではないと教えられているのです。その祝福は、神によって豊かにされたその人を通して、貧しい人、寄留者という弱い立場の人々が生きながらえるためであるということです。自らに与えられた祝福のう

ちに、「門前に横たわるラザロ」を見いだすようにと招かれているのです。

主イエスが「神と富とに仕えることはできない」と教えられたとき、ファリサイ派の人々はそれを聞いてあざ笑いました。それは彼らにとつて神に仕えることも富に仕えることも、共通したものと理解されたからです。しかし主イエスが教えられているのは、次のようなことなのです。「神に仕える」ことは神の祝福を自分だけのものにしてもいいということではなく、それを必要とするすべての人々と分かち合って生きるということにほかなりません。一方「富に仕える」ことは、神の祝福について律法を遵守するという自分の努力の結果、自分だけに与えられたものとして、すべてを自分のうちにとどめてしまうということにほかならないのです。神に仕える者の視線は、すべての人々に向けられるのですが、富に仕える者の視線は、ただ自分のみ向けられるのです。そして、その視線は決して交わることができない。「神と富とに仕えることはできない」とは、こつこつことなのです。（聖書降臨後第16主日）

森本あんり先生講演会

○田○一郎

9月8日の礼拝後、午後12時半から2時にかけて国際基督教大学学務副学長の森本あんり先生をお迎えして、「AI時代に人が人であることの尊さを考える」と題して講演会が開かれました。この講演会は、東教区から頂いた伝道支援金を原資とし



て藤が丘教会で行われる伝道活動の一環として開催されました。昨年来より、○野○苑さんに元恩師である森本先生にアプローチして頂いてこの講演会を開催することが出来ましたことを感謝します。講演会のチラシを発送したのがちょうど一カ月前だったので多少焦りましたが、教会員の皆さんの口コミをお願いしたり、フェイスブックを通じて情報発信したり、東急藤が丘駅構内にポスターを掲示したりして宣伝をしました。おかげで講演会には、教会員31名・教会員以外の方19名の計50名の方が参加されました。

森本先生の講演は、はスライドを使って次のような講演でした。

「最初にアレン天文台の紹介があって、50年以上地球以外の生命体の探索を続けているが成果がない」というお話がありました。「この努力は、人間が本能的に持っている、外から誰かから語りかけてもらいたいという心情の表れかもしれません。カントに言わ

れば、星辰をちりばめた天空の運動法則には自由はないが（教団讃美歌74番）、心の内なる道徳法則には人間がそれに従うか否かの自由がある」そうです。また「仏教用語の『ダルマ』は正義・法則・義務とかと言う意味ですが、それはキリスト教の『ロゴス』にも通じる」そうです。「八王子にある日本共産党のお墓には『不屈の戦士、ここに眠る』という唯物論者らしからぬ墓碑が書かれています。とにかく、人間は人間以上の何かと繋がっていたいというのが自然な感情の様です」。

「ところで、京都大学の霊長類研究所では、猿にじゃんけんを教えているそうですが、果たして本当に猿はじゃんけんのルールを理解しているのでしょうか。単にパターンを覚えているだけではないでしょうか。また*サールの『中国語の部屋』にいる人は、本当に中国語を理解して答えているのでしょうか。今日のAIも、例えばチェスや将棋の分野で優れた技能を発揮していますが、果たして本当にルールを会得しているのでしょうか。但し、将来AIが自分で自分を改良し始めるようになれば、



もはや人間はいらなくなるのではないのでしょうか。

「人間には『偽る』という能力があり、それは偽りの自分と本当の自分を使い分けることが出来るからできるわけであり、つまり自分で自分を認識する能力があるということです。人間は、有限さを知っているがゆえに、『私』という個を認識することが出来ます（詩編8編4節5節）。AIはどんどん進化し続けるので、有限さを理解することは出来ません。また、人間は今ある姿から、将来あるべき姿を想像することが出来るのです」。

この後、質疑応答があつて、講演会は終了しました。大変分りやすい講義内容ではなかったかと思えます。皆様のご協力のおかげで、今回の講演会を盛況のうちに終えられましたことを感謝します。お手伝いをして下さった方ご苦労様でした。

*「サール」：ジョン・ロジャーズ・サール。米国の哲学者、専門は心の哲学。



「イエスは舟から上がり、大勢の群衆を見て、飼い主のいない羊のような有様を深く憐れみ、いろいろと教え始められた。」(マルコによる福音書6章34節)

チャプレンスタッフ礼拝が続けられています。チャプレンスタッフはルーテル学院のお昼の礼拝を運営しています。この働きは私達が仲良しグループだからやっているわけではありません。アルバイトのようにお金が出るからやっているわけでもありません。イエス・キリストにならう働きます。

先ほど、お読みいただいた聖書の箇所を通り、イエス様は私達を憐れみ、優しいことをして下さいます。この「憐れみ」という言葉の裏には「は

らわたがよじれる」という言葉が隠れているそうです。新共同訳では「憐れむ」と訳されていますが、原典のもともとのギリシア語の聖書では「スプランクニゾマイ」とあります。これは「はらわたがよじれる」という意味です。私はこのことを授業で聞いてとてもビックリしました。その優しさには似つかわしくない、この「憐れみ」という感情はとても痛いものでした。イエス様はきつと、痛がっている人より痛がってしまうお方なんでしょう。

では、私たちはイエス様のように、「憐れみ」をもって働いているのでしょうか。イエス様のように、痛がっている人より痛がっているのでしょうか。チャプレンスタッフだけに言えることではありません。どんな仕事であろうと、本当に優しいことをするには、まず憐れみが必要なはずです。私には出来ていません。イエス様のように憐れみを持って、誰かに接する事ができません。そんな私が礼拝を運営するなんて笑っちゃいます。イエス・キリストにならう働きなんてできるはずもない。しかし、今、私はここに立っています。イエス様

はこんな私に、今日の礼拝のメッセージをさせています。

1年生の後期から、チャプレンスタッフをしていて気づいたことがあります。私が3年生になってきている事です。中学も高校もろくに通ってない、こんな私がギリギリ大学3年生になっていきます。それは、家族が、友達が、後輩が、先輩が、先生が、皆さんが支えてくれたからです。私に憐れみを持って接してくれたからです。

私一人では、礼拝なんて守れない。チャプレンがいて、礼拝委員会の皆

さんがいて、チャプレンスタッフがいて、先生方や神学生がいて、イエス様がいるから、私は今お話をしています。

イエス様は私を憐れみ、優しいことをしてくれます。しかし、その優しさには似つかわしくない。この感情はともつよい痛みからくるものです。

私は、皆さんを通してイエス様の憐れみに気がきます。私もいつか皆さんのように、イエス様のように憐れみを持って誰かと共に生きるものになりたいです。お祈りします。

今月の受洗記念日の皆さん

- 11日 清〇〇兄、清〇か〇ね姉
- 13日 〇飼由〇子姉
- 〇林〇也兄
- 24日 清〇〇〇子姉
- 25日 〇田〇一郎兄
- 27日 〇原ま〇か姉
- 〇村〇樹兄
- 28日 〇山〇兄、〇山〇子姉
- 29日

おめでとうございます。



喜ぶ人と共に喜び、泣く人と共に泣きなさい。
ローマの信徒への手紙 12章 15節
藤が丘教会ウェブサイト <https://www.jelc-fujigaoka.org/>
フェイスブックで礼拝のライブ中継をしています。(毎日曜日午前10時半)